

ついてお教えいただきたいと思います。

濱口 人間基礎科学科がどちらかというと基礎的なことをやりまして、人間健康およびスポーツ科学科が応用をやるというふうに位置づけるといいと思いますが、私自身が人間基礎科学科に所属しているので、これで話はいいんですけれども、2つの学科の先生方からあるいはそこは違うとクレームがつくかもしれません。私の頭の中の概念図としては、大きく言うとそういう図形になっております。

安栄 私の認識が違ったかと思いますが、早稲田大学で人間科学部としてスポーツを非常に重要視して入れたのは11年前ですね。多分当時の学部長さんだったと思うんですが、確か受験雑誌に、人間科学科の1番大切なテーマは人間であって、これを追求するためには心と身体をトータルに研究するんだと、そういう面でスポーツとか体育、身体面は非常に重要視しなければならない、とお書きになっていました。そういった点に力点を置いて、こういった科目を取り入れたというようなパンフレットがあったら分かりやすいんですが、そういうことで僕自身は理解してきたわけなんです。

濱口 今おっしゃった説明は、初代学部長が絶えずそういうことをおっしゃっていたので、私もそういうふうにご理解いただいても結構だと思うんですけれども。

司会 前のフォーラムのときには、人間科学の研究者の後継者養成ということで大学院教育にも論議が及んだかと思いますが、そういう問題も含めてもしございましたらお願いします。では後程またお出しいただくことにいたしまして、続きまして常磐大学人間科学部長の安田先生、どうぞお願いいたします。

安田健次郎常磐大学人間科学部長「人間科学の教育—現状と課題」

常磐大学の安田と申します。出身は理科系なものですから、申し上げることが少しづれるかもわかりませんが、我々の学校の現在の紹介と悩むことその他、少し申し上げたいと思います。

そもそも理科系には人間科学的な発想がなかったかということになります。さっきからいろいろな名前が出ておりましたけれども、事の始めはボーアの法則のボーア、物理学者で水素原子の解明でノーベル賞をとったボーアの日本訪問がきっかけであると言われております。そのころは理化学研究所に仁科所長がいらして、コペンハーゲンに留学して、その後でボーアを招いたわけです。昭和11年のことだと思います。そのときにボーアが言うには、物理学はやがて人



間を包括的に考えなければならないということを言ったというのです。それはどういうことかという、今考えますと、自然科学ですから、自然の中から法則性を引き出すという彼らの方針をそのまま人体にあてはめようとしたんじゃないかということを考えます。

ですから今言われていますように、いろいろな科学から人間の本性の中身をのぞくことということではなくて、むしろいろんな科学というのがなかつ

た時期から、ごく初歩的な自然科学から人間の役割をのぞかなければならない、その中からいくつかの法則性を引っ張り出さなければなりません。そういうようなことから言われたのではないかと思います。

ただこれに対して反応した数人の学者がおりまして、医学では例の武見太郎です。武見さんは医学部をはなれて、理化学研究所の仁科所長の下にいまして、物理化学のようなことを専攻していました。戦後一時、ポマードから歯磨きから全部葉緑素というのがありましたけれども、今申します葉緑素、を引き出してきたのは武見さんであります。そういうように、全く医師会長とかそういうものに無関係で物理学あるいは一部の科学を専攻していたわけですが、医学では武見さんあたりが、そのときに違うグループでありますけれども、茅誠司などとかなり接触していました。それは結局は当時の人体の仕組みなどという、今で言えばフォーラムなんでしょうけれども、そういう話し合いのグループをつくりました。武見さんも酒を飲みませんし、仁科さんもあまり飲まなかった。そこでいろいろな話をしていた。それがだんだん高じてきて、やはり生存というもの、生存という意味は、現在の生活をしている人間という意味ですけども、生存には単なる身体的なことだけではいけないんだと、それを理解するには小さい所では社会の最小単位である家族から心理学、社会学一般全部入ってしまうんですけども、そういうことを考えなきゃならないと言うようになったのです。主として理科系から考えて、医療経済学とか医療資源の開発とかそれから人口問題とか遺伝子の問題とかいろいろなことを、すでに戦後昭和30年前後に話をしていたそうであります。

我々はそれを耳に聞いてはいたんですけども、実を言いますと、明日の診療に役に立たないと思いました。僕は電子顕微鏡学をやっていたんですけど、あまりにも構想が大きすぎて明日につながらなかったものですから、先輩の言うことは一応耳にしておこうということで聞いていたにすぎません。どうもその辺が理科系の人の特徴のようでもあります。

もちろん世界には他に多く気が付いた人がいるのでありましようが、少なくとも日本の中に

おいては、昭和20年前後から昭和35~40年ぐらいまでがそのステップであったと思います。そういう目で一つ見ていただいて、文科系の方のように言葉が決して豊富ではありませんから、あまりに直進的になりますけれども、少なくともいくつかの学問を考えてみたいというわけがあります。

もし許していただいて、我々の側から総合と学際的という言葉を理解させていただくならば、総合というのはたとえば、これは全くここでは役に立ちませんが、僕らが総合というときには個々のものが集まりあって、ある一定の目的をもった集合のことをいいます。たとえば国立癌センターあるいは大阪の循環器センターあるいは東京都の脳神経研究所ですね。ああいうセンターまたは研究所というときに総合という概念が一つ生まれます。

それからもう一つの総合は、これもちょっと違った分野で申しわけありませんけれども、病院の外来における総合外来というのがあります。それはどういうものかという、最初に腹が痛いとか胸が痛いとかいろいろな訴えをもって来た場合に、そこに相談します。これは、あなたの病気はここら辺らしいから何科に行つて精密な検査を受けなさいというふり分け外来です。それを総合というなら、僕が良く分かる総合であります。

学際と言いますと、科目の間で科目と言いますけれども、僕が初めて中国へ行って教わってびっくりしたんですけれども、科間という言葉がありました。これは科と科の間という意味なんですけれども、他の分野ですと例えばレントゲン科があります。放射線科は昔は内科の人がやり、外科の人がレントゲンをとっていたわけです。それをある時期、昭和の初めの頃からレントゲン科という所がそれをつかさどっています。その方が専門性が高いということで、これは境界領域として生まれた学科です。それから逆に分かれた学科は泌尿器と生殖器です。あれは昔は泌尿器科としていたんですけれども、今は分かれております。それから同じ総合と言っても、最近出てきたのはリハビリテーションです。こういうことを申し上げても今先生方には何らの役に立ちませんでしょうが、我々の判断はそこあたりです。科間ということはこういうことだなというときに参考にするのはそこら辺であります。リハビリテーションは、骨や関節の悪い方だけではなくて、脳神経症状からきたものと、精神面のリハビリテーション、身体的な構成上の問題すべてをつかさどっているわけで幅広い学問です。前は全部内科のリハビリテーション、外科のリハビリテーション、整形外科のリハビリテーションと分かれていたんです。それぞれ別々に温泉にあつたりなんかしたわけです。それを1カ所に集めまして、システムの上へのせたので、現在非常に有効であります。

それから中央検査室というのもありまして、先生方の感じでは血液を採つてすぐG O Pが高いとか、あれも昔は私どもが学生のときは全部我々がやっていました。内科の外来の隅の方でここそと色を染めてこれはばい菌がありますと、奥の方で糞便を染めましてここに寄生虫がいますというようなことを各科でやっていたんです。それがもう戦後、これもアメリカの影響ですけれど、中央化して、これも完全な一つの科目として成立しております、そこはそれ相

当の教育効果があるということでもあります。

ここでご説明申し上げたのは単なる医学の問題であって、ただ僕たちの考える総合というものはこういうものであるということでもあります。もっと広く人間を考えることは当然必要なわけで、そこら辺では多く学ばさせていただいているところでもあります。

さて我々の人間科学部の内容でございますが、ちょっと小さいんですが、基本的に申せばこのような人間関係学科と組織管理学科とコミュニケーション学科があります。これはいろんなパンフレットにでております。その中身は共通科目と基礎科目、語学、卒業論文が主ですが、ここに総合講座というわけのわからない科目があります。これは就職に関連した所の別のグループであります。ただこれも一応単位には入りますけれども、ちょっとこの範囲の中に入れるしかありませんのでここに入れました。それからこれは社・心・教で、これは普通の大学における文学部の中身そのものだと思っていただいていた方がいいと思います。そういうことを言うと語学の方には怒られるんですが、とにかくこの辺にだいたい基本科目があって、専攻科目に連続しています。

組織管理には多少基本科目があって、コース共通の科目と企業と行政に分けて、いろいろ教育内容を分けてあります。これは組織図でなくて、むしろカリキュラムの分け方であります。組織図でいいますとそこまですになります。

それからコミュニケーションは、同じように基礎科目、共通科目、それから対人コミュニケーションを小科目等に分けて教育をしているわけでもあります。

それから卒業に要する単位というのも、私は単位制の学校から来なかったので良く分からないのですけれども、少なくとも今やっている単位はこういうことで全部で124です。ここにある総合というのは、今必修0になっていまして、これは後で説明をいたします。

個々にはパンフレットその他がございまして特に申し上げることございませぬけれども、たとえばこの人間科学の学部共通というものがございまして、このように分かれております。教育関連科目とあるいは司書関連科目というのが一応この共通の中に入っております。それ以外はこういったいくつかの分類に分かれておりまして、それはだいたいどの大学でも似たようなことだろうと思います。特別に我々だけがもっているものではないと思いますが、形だけお目かけるとこういうことになります。

ここで総合科目というものは多少生物医学的な問題、それ以外に生命と科学、思想と文化、このように一応分けておりますけれども、それぞれにだいたいどういう内容かということはお分かりかと思えます。もう少し詳しく申し上げます、と小さくて恐縮ですが、生命とか環境とか科学と技術とか、このように4つ程に分かれております。それぞれに多少生物医学的な所とか、一般的な数学とか、物理とか、あるいは倫理学その他の問題とか、あるいは制度の問題を一般的にやっているわけです。

このポイントは結局これなんです。ここに点々とくっついているのは、実はもう一つ国際

学部というのが後からできまして、そちらとベースが共通なわけがございます。彼らもこの単位をとりにきますし、人間科学部ももちろんきます。要するにここに出てきた理由はいろいろあるんですけども、その一つに人間科学の専門性は何であるかと言われて、言葉がつまってしまうことがあります。その揚句に、あまりにも人間科学の専門専門と言っていると、専門を打破するためにつくった学部が自分の専門の中に閉じ込められてしまうのではないかと、したがってそれはよろしくないだろう、したがって他の科との共同のいくつかの学問については共同に勉強するようにしてはどうかということで、先程の早稲田大学の話しもございましたけれども、学部をこえてどこでもとれるというのがこういう科目になっているわけでありまして。

他に語学があります。しかし語学は問題がございまして人間科学の求める語学は普通の昔の文学あるいは経済学等における語学であります。ところが国際学部の語学というのはもっと高級なと言いますか、複雑なことまで知らなければならない。それからベトナム語とかいろいろありまして、広い範囲をしなければならぬ。そういうことで確かにその中に共通に入れていたんですけども、なかなかその範疇に入りませんで、語学にはA、Bと使わざるを得なかったというのが実情であります。

総合というのは一つの皮肉な名前でありまして、普通総合というからには、個々のものがあるということが先でございますが、最初から一緒になっていることを考えているわけです。

ここに今の人間関係学科の専門科目をずっと並べてあります。これもすでにご存知だと思います。社・心・教、つまり社会、心理、教育というものの中を細かく分けているわけで、ごく一般的な文科系の名称であると思います。

一応ご紹介だけしておきますが、あとは組織管理の方はやはり企業と行政とはどうも違うということで、最近我々がコース別にしまして、共通のものと企業のは別々です。それからいわゆるコミと言っている中身は基本科目と対人とマスコミというふうに分けています。一応これは講義のカリキュラムということで、そのまま載せてあります。

ここに同じような再統合がありまして、ここにくるまでに3回の変化をしております。15年間に3回やっています。5年前につくったのが9科目であって、それはこういう科目であったわけでありまして。もちろん下でございますけれども、いろいろな周辺へのニードとか再統合とか、単位が細かすぎてその間の特質性がないとか、いろんなことからずっと再統合してきまして、こちらへでてきたのがこれでありまして。したがって、ずっとここまであるものが非常にいくつか集約されてきたという形を含んでいると思います。

どういう哲学でそういう再統合をしているかという今の司書課程もそうですけれども新と旧とここに分けてある理由は今年から変えたものですから、もっと変えますと私が昨年この科目をとったんですけどもその単位がどうなるんですかという質問に耐えられないということで、こちらはこちらに転換できるという意味で両側書いたものを配っているわけです。

いずれにしても、このように再統合しまして現在にきているということでございます。

現実はそのなんですけれどもいくつかの問題点を申し上げます。だいたい学生側の問題よりも教える側が、統合ではないゆるやかな総合をいかにして実現するか。要するに原理は分かった、アイデアも分かったが、実際の教育にどう反映させるかということに何人も苦勞するわけです。それでやぶれかぶれの言葉で言えば、どうでもいいんだと、分かりやすいことを総体的に言えばいいんだということになります。そう言われますと、じゃ浅く広い知識を簡単に話せばいいのかということになります。専門を深くやってきた教員であればある程、浅く広く教えて満足するということに満足できないということになります。この辺が一つ教員側の問題です。学生側がそれを知らうが知るまいが存じませんけれども、ある程度平たくおしなべた話をせざるを得ない。これは悲劇というよりもむしろそういう科目なんだと思わざるを得ないと思っておりますけれども、一つの問題点であります。したがって専門の定義とその講義の深さの問題があります。

その次に同じ教育といっても大学院がございます。大学院は教育制度とするか研究制度にするか、どう扱ってもいいんですが、大学に行く人が果たして深淵なる人間科学の奥義をきわめようとして来ているのか、それ以外の目的なのか、良く分からないんです。表向きはいろいろ言いますが。現に真面目な学生が非常に多いと思えますが、これもどういうふうに扱ってあげたらいいのか。教える側には人間科学という専門をやっている人はほとんどいないと思えます。ちょっと他の大学のご意見を伺いたいと思うんですけれども、みんな昔の経済学、昔の法律学、昔の専門をそのまま続けた教員生活をしているわけです。講義のときにはちょっと崩した広い面を、大学院のときにはもうちょっと上のものを、というように教えざるを得ないということ、これは大学院におけるもう1つの問題点であります。

それから最後に、いずれにしましても私どもの大学を14年前に出ているとすれば、卒業生はもう39歳ぐらいになっているはずなんです。しかし1人の助教授もいませんし、1人の講師もいません。ましてや1人の教授もいません。依然として教授が外から来る。そういう状態をくり返しております。我々としてはこれでいいのかということを考えながらも、ちょっと今手を打てないでいるというところでもあります。

したがって、結論的には教員の教えるときの態度の問題をどうしたらいいだろうか、それから大学院のときの研究指導をどの程度にするか、どのようにして専門の学生を残すか、こういうことが我々の当面の問題であります。

以上取りとめのないことで申し訳ないですけれども、結局はそこら辺に集約されてしまうのです。それをもう1度ちょっとお示ししますと、これは非常に簡単な絵で何も書いてないですけども結局、例えば経済学部だとするとある所は非常に高く学ぶであろうし、そして多少それに対応する所の近くの周辺の学部があります。しかしそれ以外の所は勉強をあまりしない。それに対して人間科学というのは、それぞれにいろいろなことを学びながら出るから、面積においては広いけれども、深さにおいては劣る。率直に言えばそういうことを目的にしたと思う

んです。

それから科の間の関係というのは同等の大きさではありえないだろうと。たとえばこちらから来た専門科目とこちらから来た専門科目がある所では非常に近いが、二つに接触していたり、あるいは二つの間に存在してお互いは縁は少ないんだけど、中間にあるものもあります。そんなことも考えながら理解していこうということでもあります。

それから次にこれが問題なんですけれども、別に我々の全部がこういうことを考えたわけはありません。例えば経済学、物理学にはこういう範疇の中でいろいろな専門科目があるだろうが、それぞれに多少とも今までの範疇を破ってきているであろうと思います。このいくつかのものについては、これは同等の大きさに書いてますけれど、これは間違いです。どちら側からか、接触して違う分野が出るかもしれない。また一つからでてもそれが違う独立していくかもしれない。しかし、そこに至るまでには教育上はやはり基礎を教えるべきであって、そうしないと統合と言っても意味がなくなります。たとえば18歳で入ってきた人に経済学も物理学も行政もすべて総合する力というのはどういうふうにあるのか。あるいはそのように仕向けはしても、やはり経済学などの基本は学ばせるべきでしょう。そしてこれはつまらないかもしれないけれども仕方がない。その学問にはそれぞれ深さがあり昔の1800年からあるものから最近に至ったものまでずいぶんあるでしょう。これは別に私が書いていることで、常磐大学がこういうことをやっているというわけではないんですけれども。

その次にいろいろと矛盾をはらんできて、あるいはそれ以外のことに手を出し始めている学科もある。たとえばバイオテクノロジーなどはそうです。バイオロジーだけでは済まない。テクノロジーだけでも済まない。遺伝の方法だけでも済まない。移殖に至ってはもっとそうです。そういう所があってどういう原因でできたかということは高学年で教えたかどうかと、そして学校を出たらやはりある水準以上のものの共同研究にこの大学院のテーマとするか、それからいくつかを結びつける、その間の中間の形というものをこういうふうにつくっていくか、そういうことを勉強すべきだろうと思います。それでいかにもそうすると逃げているようなんですけれども、正直に申しますと、経済学部専門にやってきたら人間科学部から行った人間はかなわないだろうと、視点が違うであろう、成果も違うだろうと思います。そういうことからすれば、やはり我々は新しい所を見つける、あるいはお互いに関連させるということに研究が向いたらどうなのだろうか。研究とはつまり、大学院でということですが、テーマにはこういうことをとりあげたらどうだろうかということでもあります。

これは一つの試案であって、これにここにクエスチョンと書いてあったら、全く無関係に新しい科目は出ないだろう、何かどこかから出てくるだろうという意味でいうのです。もしこういうことがあれば、たとえば宇宙飛行なんていうのは全く初めて出てたんではなくて、宇宙学、天文学などのいろんなものができて可能になっていくわけです。そういうことでクエスチョンになっています。そんなことが今私どもが多少考え、多少ディスカスしたいことです、これは

現実ではありません。一つの理解であります。そういうことで今日はここまでのご紹介であります。

司会 安田先生、どうもありがとうございました。ただ今、特に医学の領域における総合という概念を中心にしながら、常磐大学の現行のカリキュラムの中で特に総合ということがどのように行われているかということをつえながら、大学院教育も含めて問題点を整理していただきました。先程お願いしましたように、ご意見ではなくてこういう点では常磐大学ではどうなのかということを確認するような意味でのご質問があればお願いします。

森井 文教大学〔人間科学部長〕の森井利夫です。きわめて簡単な質問をします。早稲田大学の場合にも同じなんです、大学院は人間科学研究科でいらっしゃると思うんです。人間科学研究科〇〇専攻というような専攻名を教えてくださいませんか。

安田 今ちょっと細かく全部覚えていないんですけども、先程の専門科目の中のいくつかがそのまま専攻名になっています。

森井 大学院の研究科の中の専攻がそんなにたくさんおありになるんですか。

安田 いえ。四つぐらいです。

濱口 早稲田は二つに分かれていて、一つは生命科学専攻、もう一つは健康科学専攻の二つに分かれています。

司会 その他ございませんか。それでは安田先生、どうもありがとうございました。それでは最後になりますけれども、札幌学院大学の中野人文学部長をお願いします。

中野徹三札幌学院大学人文学部長「人間学概論Aの講義の経験から」

最初、報告することとしては簡単に、学部開設後間もなく人間学概論Aという、これは人間科学科の必修科目で1年生が受けるわけでありましてけれども、その経験を話そうかという程度のことと考えておりましたけれども、他の諸先生からそれぞれの学科、学部の成り立ち、特徴などのご報告があるということで、急拠それをも少し補いまして、その他の資料と一緒にご報告させていただくことにいたします。参考資料のレジメ〔120頁以下の資料(6)を参照〕が四つ程ございますけれども、随時参照していただきながら、報告項目に沿って簡単にお話し